

迷いながらも希望を持って



歌うことで「天上にも昇っていく喜びを自分も感じ、相手に与えられる」と深瀬 瀬廉さん

文化芸術の分野で活躍する卒業生も少なくない。バリトン歌手の深瀬 瀬廉さん(27、2007年卒)は、趣味でオペラをやっていた母親の練習風景を、小さいころから見て育った。中学3年から本格的に歌の個人レッスンを受け始め、高校に入学すると音楽部で合唱も楽しんだ。「オペラ歌手になる」という夢はずでに固まっていた。

高校3年のときには全国学生音楽コンクールの声楽部門(高校の部)で優勝。3月にあった高校野球の選抜大会開会式では、甲子園のグラウンドに立ち、君が代を独唱した。「すごい緊張。球児の顔なんて覚えていない」

高校の勉強では数学にハマった。「パズルのピースが合わさるみたい

で、問題を解くことが楽しくてしかたなかった」。しかし、「音楽の道に進みたい」「イコール「文系」という進路選択しか与えられず、「3年の数学ができなかったことが今でも悔しい」。

東京芸術大学・大学院へ進学。在学中に2年間ドイツに留学もした。今年9月から再び渡独し、歌に磨きをかける一方、日本の伝統的舞台芸術などを外から見つめ直したいと思っている。「日本を知るためにヨーロッパで学ぶともいえます」

小さいころから物語を書くことが好きだった作家の小川糸さん(42、1992年卒)は、中学生のときに「コラムニストになりた」と相談した先生に、「いい高校、いい大学に入れ」とアドバイスされ、山形東高校へ。しかし、入学してすぐに「失敗した」。受験を意識した勉強がつまらないし、ついでにいけなかった。

学校に行きたくない自分に無理強いするため、2年からは一番厳しい部活、野球部のマネージャーになった。ルールも知らないところから始め、スコアもつけられるようになり、ボールを縫い直したり、大会前は授業中でも千羽鶴を折り続けた。一通りの青春は終わった。一方で、「常にうつつとした感じ」を抱えていた。

清泉女子大学に進学し、古代日本文学を専攻。卒業後は編集プロダクションなどを経て物書きの生活へ。編集者に作品を読んでもらったり、賞に応募したりしたが、10年以上芽は出なかった。「もうこれでだめだったらあきらめよう」と、好きな料理をテーマにした作品が『食堂かたむり』(2008年)。デビュー作であり、映画化もされるヒット作となった。

この春に山形県立の中高一貫校が開校した。その校歌の作詞を担当した。大人でもあり子どもでもあり、何でも決められるわけでもない、迷いの多い時期。「でも学校生活は無駄ではない。希望を持っていこう」。そんな思いを込めた。

(編集委員・根本理香)



好きな男子生徒にお弁当を作りたいと思ったのが料理好きになったきっかけという小川糸さん

次回は群馬県立前橋高校です。